

心理科学のこれから

心理科学部長 高橋 憲 男

この小稿では心理科学部立ち上げの経緯と、心理科学のこれからについて簡略に記したい。

心理科学部の立ち上げ

12年前、法人の専門学校高度化計画を進めるため、看護福祉学部の臨床心理学専攻と札幌医療福祉専門学校の言語聴覚学科を“心理科学部”とするアイデアを提示した。

“心理科学”で臨床心理学と言語聴覚学を連携させることができると考えたのは次の理由による。International Union of Psychological Scienceは、心を基礎・理論・応用のすべてにわたって教育研究するのが心理科学であると示していた。また、American Psychological Societyの学会誌Psychological Scienceでは、心理学および、認知科学、神経科学、言語（科）学、社会科学にわたった研究が必要であると主張されていたことである。

この考えに立って、少子高齢化社会におけるコミュニケーションのしょうがい等に対して社会に貢献できる人材の養成を新設学部の設置趣旨とした。文部科学省とのかなり面倒なやりとりを経て、平成14年に日本で初めて心理科学部が発足した^{注1、注2}。

この10年、臨床心理学科は学部教育と大学院教育のあり方、資格の問題、臨床心理学と一般心理学との関係などの問題を抱えてきた。言語聴覚士は国家資格となったが、医療の高度化を受けてコメディカルスタッフとしての知識・技術水準の高水準化の要請など多くの課題を抱え、心理科学部はこれらの問題への対応を提示しようという意気込みをもってきた。^{注3}

日本における心理科学の展開

2002年に八木昭宏・山田富美雄が編集した心理学評論の特集“心理工学”が発刊され、心理科学の応用分野が目指す一つの方向性が明示された。

心理科学部発足後10年で、広島国際大学に心理科学部、関西学院大学に心理科学研究室、専修大学に心理科学研究センターができた。広島国際大学の心理科学部は臨床心理学科、コミュニケーション学科と感性デザイン学科から構成され、関西学院大学は幅広く心理学の基礎・理論・応用領域がカバーされ、専修大学はベイズ統計学、進化心理学の観点を取り入れ融合的心理科学の創成がうたわれている。

2007年にはJ・ブルース・オーバーマイヤーと今田 寛の“心理学の大学・大学院教育はいかにあるべきか”が発刊され基礎心理学からみたクリニカル・サイコロジストの教育問題が論じられた。

上記の展開は、日本において心理学や臨床心理学の教育研究組織が新たに組みなおされる必要性が認識されていることが示唆されている。

近年の科学技術の進展と“心”の科学

近年の科学技術の発展と“ヒト”の変化についてはカーツワイルのヒトとゲノム、AI, ナノテク等が

融合した世界が参考になる。あるいは、IBMのNEXT 5におけるアバターを使った診断治療システムなどの提言も参考になる。また、BMI (brain machine interface) に見られるように、意識過程の神経科学的操作がすでに起きている。

本学においては医療との関係を考えなければならないが、例えば“分かりあう”ことをすべて意識過程として説明することはできない。層としてとらえた心と、身体及び脳科学を統合した研究が必須である。この様な研究は工学、経済学、リスク対応領域でもその必要性が強く認識され、コメディカル領域においても非常に有用と考えられる。

心理科学は“心”の立場から、“持続可能な社会”を作るあげることには貢献するため、まさに心理学、認知科学、神経科学、言語学、社会学、数学、工学等の基礎・理論・応用領域からなる組織として再編されるのが次のステップであると考えられる。

注1 文部科学省とのやり取りの一つに、心理科学という名称は相応しくないというものがあつた。

注2 故・岩本隆茂教授は三宅和夫・元北海道大学教育学部長とともに、看護福祉学部の臨床心理学専攻の立ち上げに尽力され、心理科学部及び心理科学研究科の設置にもお力を頂いた。

注3 大学院修士課程臨床心理学専攻は(財)日本臨床心理士資格認定協会指定の第2種大学院(当時は東京以北で唯一の指定大学院)、第1種指定大学院となり、平成19年には文部科学省大学院教育改革プログラムとして「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」が採択され、事後評価で最高の評価を受けた。言語聴覚学専攻も「言語聴覚士卒後研修プログラムを含む大学院教育」がGPとして採択された。